

## A病院緩和ケア病棟におけるニューマン理論に導かれた 学習会開催の試み

### ～学習会の企画・運営者の試行錯誤の過程からみえた方向性～

氏名：高野美子

所属：JA神奈川県厚生連相模原協同病院

がん終末期の患者とその家族は残された時間をおだやかに、そして自分らしくすごしたいと希望して緩和ケア病棟を選択します。緩和ケア病棟の看護師は、患者と家族の苦痛を問題と捉え、その問題を解決しようと努力していますが、患者・家族が抱える難しい問題に直面したとき、どう対応したらいいのか、どう対応したらよかったのかという迷いや不安全感を経験することは少なくありません。

A病院緩和ケア病棟師長（以下、師長）は、「寄り添う過程の意味に着目できる看護理論を拠り所に持った看護師に成長して欲しい」という願いを持っていました。そこで、ニューマン理論を学習したがん看護専門看護師（以下、OCNSとする）であり、前年度までがん相談支援センターに勤務し緩和ケア病棟との連携を担当していた筆者に、学習会の依頼がありました。

筆者もかつては緩和ケア病棟看護師らと同じように思い悩み、自信を失う経験をしてきましたが、ニューマン理論に出会い学ぶことでひとつの大きなよりどころを得ることができました。筆者の実践に大きな影響を与えたのは、「病気」とは患者や家族の「健康の体験」の一部であること、そして患者や家族には周囲の想像をはるかに上回る力が備わっており、意識の拡張という成長を遂げる存在であるという見方でした。だからこそ、日々病状の変化がある終末期の患者と家族が“いま”を自分らしく生きていると信じ、その過程に寄り添う看護を実践するように努力しています。

師長の依頼を受け筆者は、緩和ケア病棟看護師らが、その人らしさを大切にしたい看護を超えて、死を目前にしても患者と家族は意識の拡張という成長し続けていく存在であるというニューマン理論を学ぶならば、緩和ケア病棟看護師らの看護の意味はもっと深まるであろうと考えました。そこで筆者は「ニューマン・プラクシスの会」に参加し、先生方の支援を受けながら学習会を企画・運営することにしました。

#### 【本プレゼンテーションの目的】

ニューマン理論に導かれた学習会を開催した筆者の体験（各学習会の内容と緩和ケア病棟看護師らの気づきと運営者である筆者の学び）を紹介し、今後、ニューマン理論学習会を企画・運営するにあたっての可能性について皆様との対話を持つことです。

#### 【緩和ケア病棟学習会の目的】

全体性のパラダイムに準拠するニューマン理論の学習を通して、緩和ケア病棟看護師らが今までの自己の看護のあり様や患者や家族への関わり方に新たな気づきを得て、見方が変わり、ケアが変わることを目的としていました。全3回の開催としました。

#### 【3回の学習会の過程】

第1回学習会準備：筆者は師長や主任、緩和ケア病棟所属のOCNSと、現状と今後目指していきたい看護について話し合いを複数回行いました。そして、ニューマン理

論の重要な点については、ニューマン・プラクシスの会で助言を受け、学習会に向けての願いや目標を明確にしていくことが出来ました。

第1回学習会：テーマは「ニューマンの健康の理論に導かれたがん看護実践～私とニューマン理論の出会い～」と「ニューマン理論の主要概念について」でした。講義の後、日々の看護実践に理論を結びつけながら対話を進めました。筆者のニューマン理論との出会いの体験とケアの変化は、同様の悩みをもつ緩和ケア病棟看護師らにとっても共感を得ました。ニューマン理論の理解に難しさを感じながらも、参加者は対話で“弱い部分”や“問題”に目を向けていた自分たちの看護の見方について、気づきを得ていました。参加者は師長や主任も含めた5人でした。師長らと学習会の願いを共有してきたことで、患者や家族の変化に着目した日常の実践事例を多く語ることとなり、理論に結びつけた対話が促進されました。ただし、一度では理論を理解することは難しいため、参加の継続を呼びかけました。

第2回学習会準備：当初の目標は「学習会後に自己の看護をニューマン理論に結び付けて意味づけができる」としていましたが、ニューマン・プラクシスの会で、この目標は難しすぎるのではないかという助言を受け「ニューマンの述べている健康の概念を知る」に変更しました。毎回の学習会で軸となる概念について説明することや、文献の講読会の提案もありました。前回の学習会後の参加者の評価と照らし合わせて早めに内容の修正をすることができました。

第2回学習会：テーマは、「前回の対話をまとめた資料をもとに講義」と「文献を読む」でした。文献は「看護理論は目的的なケアを可能にする：ニューマン理論をがん看護実践に導入する」(宮原)を使用し、参加者で読み合わせをしたのちに質問を受けながら、看護の見方の違いについての対話を促しました。各自に気がかりとなっていた患者について語ってもらう機会も作り、“なぜそのように思うのか”という自己の看護の見方の気づきとなるように進めていきました。すると参加者は“こうあって欲しい”という自分の望む患者のゴールに縛られていた看護の見方に気づいていきました。筆者は、参加した看護師らが重要な気づきを得ていると実感しつつも継続的な参加が難しく次の学びに繋がらないのではないかというジレンマを感じ始めていました。

第3回学習会：テーマは「理論における重要な概念・ミニレクチャー」「事例を元にした対話」でした。参加者が抱える気がかりな患者について語ってもらうことで、筆者自身が緩和ケア病棟の日々の実践について知ることができました。しかし、1回目の学習会から、理解が深まるような看護の意識やケアの変化が見られないという焦りも生まれてきました。「もっとニューマン理論を理解したい」という前向きな意見も聞けてうれしく思いながらも、理論を伝えていくことの難しさを実感しました。

### 【3回の学習会を終えて—今後の課題】

3回の学習会を終え、発展的な学習会運営に向けての課題が見えてきました。その一つは、病棟管理者である師長や病棟OCNSの理解と協力を得ることです。彼らの協力が得られれば、日々の実践そのものが理論の理解を深める糸口となりえる可能性が広がります。さらに実践の場では予測不可能なさまざまなことが起こる為、変化に対応できるように、毎回の学習会開催に向けて柔軟に企画を練るなどの準備も重要です。今回の学習会開催の試みを踏まえて、さらに充実した学習会を継続して開催していきたいと考えています。